

## Richard Brautigan: *In Watermelon Sugar* <sup>(1)</sup> をめぐる勘考

— 「現代アメリカ文学」講義ノート —

加 瀬 正 幸

On Richard Brautigan's *In Watermelon Sugar*

Masayuki KASE

(1)

*In Watermelon Sugar* は、*Watermelon Sugar* の iDEATH という土地における、あるコミュニンの生活を元彫刻家の目を通して描いた作品である。一般的な解釈としては、「暴力的な死や自殺とともに、西瓜から得た純粹な糖をいわば生命と存在のエッセンスとして作品全体にちりばめ、アメリカの夢の回復の可能性を幻覚的に暗示」<sup>(2)</sup> した作品であるといつてよいであろう。また「アメリカの夢」とは「民主主義、自由、平等、機会の均等など、アメリカ社会の基盤をなす理念を総称する言葉」<sup>(3)</sup> であり「広義には、アメリカ文明そのものを指」<sup>(4)</sup> し「『The dream of success』という端的な表現もほぼ同義に用いられる。平等な機会を与えられた人間がその努力にふさわしい成功をうるという思想は、Franklin など多くの self-made man により裏付けられ、そうした夢の実現過程を描く文学作品も、1850年以降おびただしく出版された。代表的な作家に Horatio Alger がいる。しかし19世紀末から、成功の夢と現実との乖離は大きくなり、D.G. Phillips, Dreiser, Fitzgerald などが『成功の夢』の破綻を描くようになった。1960年代にはいつてからは、上記の理念そのものに疑いをもたれるようになり、Albee の *The American Dream*、Mailer の *An American Dream* などでは夢は悪夢にとって代わられている」<sup>(5)</sup> Edward Franklin Albee(1928- ), Norman Mailer (1923- ) より若い世代に属する Brautigan (1935-84) の *In Watermelon Sugar* においても、いわゆる「アメリカの夢」を見放し、あるいは「アメリカの夢」から見放された人々が、彼らなりの理想郷の建設を試みたが、そこは完璧な桃源郷たりえず、過去の物質文明の遺産であり象徴である “the Forgotten Works” という世界がその一角に存在し続けている。主人公の恋人 Margaret が、その世界に興味を抱いたこともあり、二人の間に違和感が生じ、彼女の自死という結末にいたる。また “the Forgotten Works” に関心を持ち、その近辺に居を構えている、コミュニン批判者の inBOIL 一味は、凄惨さの中に不可解な滑稽さと明るさを感じさせる、集団自殺事件を引き起こす。

本稿は、副題に示されているごとく「現代アメリカ文学」講義ノートを苅り込み、剪定してまとめた。また、晩年不遇のうちに孤独な自殺をとげ、死後忘却の淵に沈みつつあると思われる、マイナーな作家 Brautigan の再評価を目指す試みであるとともに、一面では、彼に捧げる鎮魂歌でもある。

## (2)

この書は、痛烈な現代文明文化批判の書である。例えば、衣食住のうち、住に関して徹底的に否認の態度を表明している。Watermelon Sugar の住民の家屋は “The shack is small but pleasing and comfortable as my life and made from pine, watermelonsugar and stones as just about everything here is.” (1)<sup>(6)</sup> とあるように、質素の極北にあると想像される「小屋」に過ぎず、建材は松、石それに西瓜糖なのである。出火の際に毒を含有する煙を発散し、人を死に至らしめる恐れのある建材は使用していない。石について明記されていないが、おそらく基礎として使用されているのであろうし、この種の小屋であればたとえ地震火災などの災害に遭遇しても、人を死に至らしめる可能性は極めて低いものと判断される。ここで想起されるのは、サモアの酋長ツイアビのヨーロッパ体験談を集成した『パパラギ』（白人を指す)<sup>(7)</sup> である。

パパラギは、巻貝のように堅い殻の中に住み、溶岩の割れ目に住むムカデのように、石と石のあいだで暮らしている。頭の上も、足の下も、からだの周りも、すべて石である。パパラギの小屋は石でできていて、まっすぐな箱のような形をしている。

たいていの小屋には、サモアの一つの村くらいたくさん人間が住んでいる。だから、訪ねようとするアイガ（家族）の名前は、正確に覚えていなければならない。それぞれのアイガは、石の箱のどこか、上か下か真ん中か、または右か左か真正面か、とにかくどこかひとつの所に住んでいるからだ。

それぞれのアイガは、壁一枚をへだてて隣り合っているにもかかわらず、普通、ほかの家のことは何も知らない。まったくなにも知らない。あたかも壁一枚のあいだに、マノノ島やアポリ島やサバイ島（いずれもサモア諸島の島々）や、そのほかたくさん海があるように。彼らはほとんどお互いの名も知らず、入口で会ったりしても不承無承一礼するか敵意をもっている昆虫どうしのように、低いうなり声をかわすだけである。いっしょに住まなければならないことに、よっぽど腹が立つらしい。

サモアの小屋に吹くような新鮮な風は、どこからともはいてこない。このような箱の中で、サモア人ならすぐに窒息するだろう。

だから不思議でならないのは、どうして人がこの箱の中で死んでしまわないか、どうして強いあこがれのあまり鳥になり、羽根が生え、舞い上がり、風と光を求めて飛び立ってしまわないか、ということである。だがパパラギは、石の箱が気に入っており、その害についてはもはや気がつかなくなっている。<sup>(8)</sup>

ツイアビは鉄筋コンクリートのアパートの生活に触れていると思われるが、ここにはツイアビの鋭い観察眼によってヨーロッパ文明生活の病理が的確に剔抉されているように思われる。Brautigan が Watermelon Sugar における住宅建築に、鉄筋コンクリートではなく西瓜糖木材などを使用したのは、こうしたツイアビの見解と無縁ではないであろう。

また、Watermelon Sugar の橋は、木橋、石橋に加えて西瓜糖橋であることが分かる。

Some of the bridges are made of wood, old and stained silver like rain, and some of the bridges are made of stone gathered from a great distance and built in

the order of that distance, and some of the bridges are made of watermelon sugar. I like those bridges best.” (2)

また著者の価値観は、主人公に「西瓜糖の橋が一番好きだ」と言わせていることから、明白であろう。[ただし、自分の小屋の前に架かる橋について、“I like my bridge because it is made of all things: wood and the distant stones and gentle planks of watermelon sugar.” (14) とある。]

*Watermelon Sugar* では、電気エネルギーは使用していない。照明は、「西瓜糖鱒油」を燃料とするランプによる。その名の示すように、原料は西瓜糖と鱒の油であり、ダム建設に自然破壊をもたらす水力発電所、有害核廃棄物を排出する原子力発電所などと違って、地上生物の生存を脅かす危険性は皆無なのである。

走る凶器といわれる自動車もない。この土地を（奇妙なことに、住居内、それも一階にとどまらず二階にも）走っているのは、川なのである。

“When I got on the other side of the room, I could smell something good coming out of the kitchen. I left the room and walked down the hall that follows beneath the river. I could hear the river above me, flowing out of the living room.” (19)

大きな川もあれば、小さな川や細流も走っている。至るところ川また川である。それは人間の体内を網の目のように循環する血管のごとくこの *Watermelon Sugar* を循環している。この作品の一特色は、水のイメージに溢れていることである。この水のイメージが、生命のイメージに重なっていることは言うまでもない。しかし、死者は透明のガラスの棺に納められて川に葬られ、狐火がはいるので常時、誰の目にも入る仕掛けとなっている。

There were four or five guys putting in the tomb. They were the Tomb Crew. The tomb was being put into the bottom of the river. That’s how we bury our dead here. But now we bury them all in glass coffins at the bottoms of rivers and put fox-fire in the tombs, so they glow at night and we can appreciate what comes next. (60)

墓地という一画に死者を隔離し、死を視野から追放して、生を謳歌する風習はない。いわばあるがままに生と死の共存の世界を容認して生きているのが、この *Watermelon Sugar* の住人なのである。これはまた、死を極度に恐れ、過度の健康信仰に生きる、現代人の不健康さに対する批判と解釈してよいのではなかろうか。

### (3)

“Charley’s Idea” (9)と題されたセクションには、*In Watermelon Sugar* で取り上げられる話題のリストがあって、その第 24 項目には “And this the twenty-fourth book written in 171 years. ‘The last one was written thirty-five years ago. It’s about time somebody wrote another book.’” (11) と記されている。この *Watermelon Sugar* に物書きはここ 35

年間存在しなかったのである。この間書物は1部たりとも出版されていない。過去171年間に出版された書籍の総数は、23冊に過ぎずこの *In Watermelon Sugar* が、24番目の書物に当たる。この事実が何を意味するのか Brautigan はなんらの説明も試みていないが、書物を情報一般の代名詞と考えると、現代における情報の氾濫、それに要するエネルギーの浪費、ひいては適正な判断をそらす恐れのある過度の情報操作などに批判の矢を向けていると判断してよい。この情報氾濫が現代文明の病理であると断言することはできないが、これを無批判に容認することを Brautigan は拒否していると思われる。また、活字文化の一形態である新聞発行は、年1回である。ここで、やや長すぎるがあえて、新聞に関するツイアビの言葉を再び『パパラギ』から引用する。

束になった紙もまた、パパラギに一種の酔いと興奮をもたらす——この、束になった紙とは何か。——タバの草で作った、薄くて、白いむしろを想像するとよい。折りたたんでばらばらにし、またたたんで、その一枚一枚にぎっしりと字が書いてある。実にぎっしりと。——これがその束になった紙であり、パパラギの呼び名というと、新聞である。<sup>(9)</sup>

この紙の中に、パパラギの大きな智恵が置かれている。毎朝毎晩、パパラギは、この紙のあいだに頭をつっこみ、頭が新しいものでいっぱいになるように、腹いっぱい食べさせる。すると頭にはいろんなものがたくさんつまり、いい考えが浮かぶようになる。ちょうど、馬がバナナをたくさん食べて腹をいっぱいにするとよく走るのと同じである。<sup>(10)</sup>

パパラギは何でも、食欲に取り込む。たとえどんなに悲しいことでも、健康な人間の理性ならすぐに忘れてしまいたいことでも。そう、そういうよくないこと、人を悲しませるようなことが、どんないいことよりもずっとくわしく伝えられる。そう、よいことを伝えるより悪いことを伝えるほうがずっと大切で、うれしいことでもあるかのように、こと細かに。<sup>(11)</sup>

だが新聞が私たちの心を悪くするのは、起ったことを何でも私たちにしゃべるからではない。そうではなくて、私たちの大酋長について、また他の国々の酋長たちについて、あらゆるできごと、人間のあらゆる行いについて、これはこう考え、あれはああ考えるべきだと私たちに指図するからである。<sup>(12)</sup>

新聞は、すべての人の頭をひとつにしたがっている。私の頭、私の考えを征服しようとしている。どの人にも新聞の頭、新聞の考えを押しつけようとする。そして、それはうまくいっている。<sup>(13)</sup>

新聞もまた一種の機械である。毎日たくさんの考えを作り出す。ひとつひとつの頭が考え出すより、はるかにたくさんの考えを。しかし、たいていの考えは誇りも力もなく、弱い。パパラギは、こんな役立たずの紙の栄養で頭をあふれさせている。ひとつが追い出せないうちに、もう新しいのを取り入れる。パパラギの頭は、自分の泥で窒息しそうになっているマングローブの沼地のようなものだ。そこには緑もなければ、実を結ぶものも育たない。<sup>(14)</sup>

ここには、当否は別として、今日における新聞紙面の実態、読者の思考の画一性をもたらす報道の機能、なによりも情報の氾濫に窒息し溺死しかねない現代人の精神生活などの一面が的確に指摘されており、この種の批判に対する Brautigan の答えが、この *Watermelon Sugar*

における年一回の新聞発行にあらわれているのではないかと思われるのである。

(4)

このコミュニオンは、必ずしも、同一の理想、思想、感性、知性を有する者によって構成されているわけではない。Charley の兄弟、inBOIL をリーダーとする「反体制」の一団が存在する。彼らは、表層的には、“The Fogotton Works”（「忘れられた世界」）の近辺に盤踞し“forgotten things”をあさり、これもとに醸造したアルコール飲料を飲み、くだをまいているだけのことである。とはいっても、集団自殺する際 inBOIL が、多数の住人が良き世界と考えている iDEATH に関して真の姿を知らせてやるという言葉、“YOU PEOPLE THINK YOU KNOW ABOUT iDEATH. You don't know anything about iDEATH.” (106) には、強い主張がこめられているように思われる。つまり Brautigan は *Watermelon Sugar* に iDEATH [i (私) + Death (死) に分解可能] という理想のコミュニオンの建設を夢想したが、目前に存在する現実を忘却することはできなかった。そのように考える Brautigan の分身をこの作品において体現する者が、inBOIL とその一味であり “The Forgotten Works” に “forgotten things” をあさる行為は、このコミュニオンを建設する際に放棄した過去の文化文明を求める行為に通じているものと思われる。つまり彼らは保守反動の一派といってよいであろう。そしてこのような思想を有する反体制の一派に近親感を持ち、彼らの近隣に暮らし、“forgotten things” あさりを開始した主人公の恋人 Margaret の行く末は明らかであった。主人公に捨てられた Margaret は、木に昇り首を吊って、自死することになるのである。

一方 inBOIL は、iDEATH にやってきて、長広舌をふるう。酒に酔っている inBOIL は、続けて “Not a damn thing. You're all at a masquerade party.” と宣言し、鱒養殖場に連れて行けば、真の iDEATH を、その真の意味を教えてやるその虚偽の姿を見せてやると叫ぶ。

“You don't know what it's all about. You don't know what's really going on with iDEATH. The tigers knew more about iDEATH than you know. You killed all the tigers and burned the last one in here. / That was all wrong. The tigers should never have been killed. The tigers were the true meaning of iDEATH, and you killed the tigers and so iDEATH went away, and you've lived here like a bunch of clucks ever since. I'm going to bring back iDEATH. We're all going to bring back iDEATH. My gang here and me. I've been thinking about it for years and now we're going to do it. iDEATH will be again.” (111)

このトラたちが象徴するものは、過去の歴史と考えてよいと思われるが、inBOIL は、その抹殺を非難して、ジャックナイフをポケットから取り出し、“This is iDEATH.” (112) と言いつつ、親指を切りとり、トレイに置くのである。すると仲間もこれにならって親指を切り取り池の中に放り込む。inBOIL は再び “This is iDEATH.” (112) と叫びつつ、鼻を、次いで耳を削ぐ。親指以外の指も切り放つ。一味の者たちも彼にならう。こうして彼らは出血多量のため死亡するのである。inBOIL は、この血なまぐさい光景こそ iDEATH の真実の姿であると主張しているものと思われる。そして、この作品が初めて出版された時点（1968年）に

においてこの集団自殺の場面は、格別の連想を伴うものではなかったが、現在読み返してみると、Brautigan は 1978年のガイアナにおける人民寺院の集団自殺<sup>(15)</sup> に類する事件を、すでに感知していたかのように、読み取れるのである。

Kurt Vonnegut は、次のように「芸術家カナリア説」を唱えている。

Writers are specialized cells doing whatever we do, and we're expressions of the entire society - just as the sensory cells on the surface of your body are in the service of your body as a whole. And when a society is in great danger, we're likely to sound the alarms. I have the canary-bird-in-the-coal-mine theory of the arts...I continue to think that artists - all artists - should be treasured as alarm systems.<sup>(16)</sup>

そしてこの説は、Brautigan にも当てはまるものと思われる。未来を感知し、警告を発することが優れた芸術家の条件であるとするなら、Brautigan もこの範疇にはいる作家ではなからうか。

(5)

Brautigan は、第3番目の 'My Name' と題された断章において、“I GUESS YOU ARE KIND OF CURIOUS as to who I am, but I am one of those who do not have a regular name. My name depends on you. Just call me whatever is in your mind.” (4) と記し、穏やさの中に勁さを秘めた一編の散文詩によって、主人公が 'a regular name' を持たず、時々刻々と事態に応じた名前、相手により変化する名前の持ち主であることを告げる。

If you are thinking about something that happened a long time ago: Somebody asked you a question and you did not know the answer.

That is my name.

Perhaps it was raining very hard.

That is my name.

Or somebody wanted you to do something. You did it. Then they told you what you did was wrong-- “Sorry for the mistake” --and you had to do something else.

That is my name.

Perhaps it was a game that you played when you were a child or something that came idly into your mind when you were old and sitting in a chair near the window.

That is my name.

Or you walked someplace. There were flowers all around.

That is my name.

Perhaps you stared into a river. There was somebody near you who loved you. They were about to touch you. You could feel this before it happened. Then it happened.

That is my name.

Or you heard someone calling from a great distance. Their voice was almost an echo.

That is my name.

Perhaps you were lying in bed, almost ready to go to sleep and you laughed at something, a joke unto yourself, a good way to end the day.

That is my name.

Or you were eating something good and for a second forgot what you were eating but still went on, knowing it was good.

That is my name.

Perhaps it was around midnight and the fire tolled like a bell inside the stove.

That is my name.

Or you felt bad when she said that thing to you. She could have told it to someone else: Somebody who was more familiar with her problems.

That is my name.

Perhaps the trout swam in the pool but the river was only eight inches wide and the moon shone on iDEATH and the watermelon fields glowed out of proportion, dark and the moon seemed to rise from every plant.

That is my name. (4-5)

この“a regular name”を持たぬ、その時その場に應ずる多様な名を有すると主張するこの元彫刻家は、「人生は舞台であり、我々は役者である」という言葉を想起させる。人は人生という舞台に立つ役者なのである。その舞台演目は多種多様であり、人はそれに合わせてさまざまな演技を披露する。その時々演ずる舞台の役柄に応じて名前は変化する。この際に問を題となるのは、こうした演技のうちに本来の自己、真の自己を見失う者がでてくることであろう。最悪のケースのひとつが、*The Minds of Billy Milligan*<sup>(17)</sup> に描かれている多重人格者 Billy Milligan である。彼は1977年10月27日、アメリカ合衆国オハイオ州ランカスターにおいて、暴行窃盗の容疑で逮捕された。当時23歳の Billy Milligan は多重人格者であり、彼の内部には24人の人間が住んでいた。彼らは、国籍、年齢、言語、経歴、教養、性別を異にしていた。アメリカ人、イギリス人、ユーゴスラビア人、オーストラリア人、ユダヤ人がいた。年齢は、3歳から26歳まで、男もいれば女もいたのである。この Billy Milligan について、劇作家渡辺保は次のように論評している。

むしろ人間はだれでも自分の中に他者の意識をもっている。しかし、たとえこの「もう一人の自分」を容認したとしても、総体的には自分自身を単一の人格、単一の心理をもつ主体的な個人と考えている。いわゆる「近代的な自我」である。この自己認識は近代がつくったものであり、この自意識の覚醒こそが「前近代」と「近代」を区別する要素であった。

私がこの本を読んだ時にうけた衝撃は、この近代的自我という単一の「私」の崩壊の兆候のためであった。

現代にはかつてないほど情報が氾濫し、メディアが錯綜し、異常なスピードで社会の状況が変化している。これからはますますこの状況は加速されるだろう。そういう状況に果たして単一の人格が対応し切れるだろうか。たしかにミリガンは病気かもしれない。

しかしこの病気は、このような状況に人間の「私」が対応し切れなくなったのであり、もっとも弱い「私」が爆発し、状況の多様化とともに二十四人もの人格に分裂したのである。したがってミリガンの存在は、世紀末の近代的な自我の崩壊を暗示している。

もともと人間は、単一の構造によってとらえられるべきものではない。多重人格は病気だとしても、その根元にある人間の多層性までは否定できない。個人の内部にはさまざまな性格があり、それらを単一のものとしてとらえたのは近代的な制度の一面であった。<sup>(18)</sup>

渡辺保が指摘するように、Billy Milligan は、この「情報が氾濫し、メディアが錯綜し異常なスピードで変化」し多様化する社会状況に、単一の人格が対応しきれなくなり、24人もの人格に分裂し、多重人格という病に冒され、犯罪に走ったのであろう。

また、神を死に至らしめ、その桎梏から解放された近代人は、精神的自由を獲得したが、それとひきかえに精神的支柱を喪失し、不安と孤独に苛まされることにもなったのである。不安からの逃走、自由からの逃走がもたらす危険性は、エーリッヒ・フロムの『自由からの逃走』<sup>(19)</sup> に詳しい。神の愛に包まれ、その摂理に基づいて生きる道を放棄した近代人は、実存の不安、外界に対する孤独感、無力感の中であって時に、次のような行動にでることもある、とフロムはいう。

外界にたいする自己の無力感は、その外界を破壊することによって逃れることができる。たしかに首尾よくそれを除去することができても、私は依然として孤独である。しかし、そのときの孤独はすばらしいもので、私はもはや外界の事物の圧倒的な力によって、おしつぶされるようなことはない。外界を破壊することは、外界の圧迫から自己を救う、ほとんど自暴自棄的な最後の試みである。<sup>(20)</sup>

こうした病的な状況下において、Brautigan は 近代的自我確立の困難さ、崩壊に瀕する近代的自我の内実について思いをめぐらし、“My Name” という詩的な文章によって、自我確立の神話から解放された「私」を歌っていると考えられる。Brautigan は、近代的自我が他者との関係によって決定されるものであるという視点をとりながら、何ものにもとられない自由な自我の存在を歌っているのである。人間精神の解放と自立の前提条件となるべき、近代的自我の存在自体が、不安と苦悩の源泉となっているかにみえる、人間実存のアイロニーに直面して、“a regular name” を放棄するとともに、その不安をも超克する道を Brautigan は探求しているのである。

## (6)

最後に *In Watermelon Sugar* の文章の一端に触れたのち、つづいて全般を総括し本稿を閉じたいと思う。

Brautigan は、美しい詩的散文を書く作家である。



IN WATERMELON SUGAR the deeds were done and done again as my life is done in watermelon sugar. I'll tell you about it because I am here and you are distant.

Wherever you are, we must do the best we can. It is so far to travel, and we have nothing here to travel, except watermelon sugar. I hope this works out. (1)

これは、*In Watermelon Sugar* の冒頭の文章である。この第1章の第1文は、“IN WATERMELON SUGAR” に始まり、“in watermelon sugar” に終わる。文頭の句は大文字で、文末の語句は小文字で書かれているため、視覚的には異なった印象を与えるが、音韻的にはまったく同一である。文頭と文末に同じ語句を据えることによって文の枠組みが堅固となり、その結果与えられる安定感および形式美に加えて、音の響きの美しさが確保されたのである。

また、この両句に囲まれた部分において、“d”音や“n”音を繰り返し響かせることによって、一種の音楽美を生んでいる。

第1文から第2文に移ると、ここで言えることは、“I'll tell you about it because I am here and you are distant.”という文章の流麗さである。つきつめると“here”と“distant”という対照的な語から生れる距離感と、それを超えて結びつくふたつの孤独な魂の存在を予感させ、陶酔感を誘うのである。

さらに、第1段落は31語から成り立っているが、そのうち複音節の語は、8語、23語は単音節の語である。実に90%余りが単音節語なのである。この単音節語の連続は、心臓の鼓動の単調ではあるが、力強い生命のリズムを連想させる。

また、“Watermelon Sugar”という言葉は、この全16の段落から成り立つ第1章に計7回（その他、watermelontrout 1回、watermelons 2回）も使用され、この小説全体のキーワードを読者の心の中にしっかりと定着させている。

この作品には、近代化の産物である現代文化文明の様々な問題にたいして、真摯に取り組む Brautigan の苦闘の跡が見うけられる。彼の作柄は、マイナーな作家の通例として大きくないが、見かけとは異なり、その思想の射程距離は遠方にまで伸びている。この作品の真の主人公は、元彫刻家ではなく、“the environment and the multipurpose watermelon sugar”<sup>(2)</sup> とする解釈もある。彼はまた、

He is aware of several currents of American tradition, especially that of the new American Eden as created by Thoreau in Walden, by Huckleberry Finn's escape to the Mississippi River, and by the Californian myth since the Gold Rush days; and Brautigan tends to condemn the new America because it has betrayed the promises of the new American Eden.<sup>(2)</sup>

とあるように、Thoreau、Twain などのアメリカ文学の伝統に連なるとともに、新たなる「エデンの園」を模索した作家でもあった。軽く平易で、時に幻覚から生れたかと思わせる詩的な散文の良さについても、触れておいた。Brautigan は、そうした文章によって、的確な時代認識に基づいた作品世界を展開し、時に未来をも見通すかにみえる作品を生み出したので

ある。

注

- (1) 使用したテキストは、Richard Brautigan. *In Watermelon Sugar* (New York: Dell Publishing Company, 1968)。
- (2) 『英米文学辞典』第三版（研究社、1985）、149頁。
- (3, 4, 5) 同上、29頁。
- (6) 使用テキスト *In Watermelon Sugar* から引用した直後の（ ）内の番号は、その頁数を表す。
- (7) ツイアビ、岡崎照男訳、『パパラギ』（立風書房、1981）。
- (8) 同上、28-30頁。
- (9, 10) 同上、101頁。
- (11) 同上、102頁。
- (12) 同上、103頁。
- (13) 同上、103頁。
- (14) 同上、104頁。
- (15) Gorton Carruth. *The Encyclopedia of American Facts & Dates* (New York: Harpers & Row, 1987). "A grizzly mass suicide in Guyana was prefaced by the murder of Rep. Leo J. Ryan of California and four others visiting the People's Temple on a fact-finding mission to the country. When Jim Jones, leader of the religious sect, learned of the event he led the group in a mass suicide by poison. The final count was 911 dead, including more than 200 children. Most of Jones's followers, like Jones himself, were American citizens." (p.774)
- (16) KURT VONNEGUT JR. *Wampeters Foma & Granfalloon* (Great Britain: Jonathan Cape, 1965), pp.213-214.
- (17) Daniel Keyes. *The Minds of Billy Milligan* (New York: Bantam Books, 1995).
- (18) 渡辺 保、「私」の発見、『朝日新聞』（1995年4月23日付）、4頁。
- (19) エーリッヒ・フロム、日高六郎訳、『自由からの逃走』（創元新社、1951）。
- (20) 同上、197頁。
- (21) Jeffrey Helterman & Richard Layman (eds.). *Dictionary of Literary Biography, Vol 2: American Novelists Since World War II* (Detroit, Michigan: A Brucoli Clark Book, 1978), p.67.
- (22) *Ibid.* p.69.

[平成7年(1995年)10月30日受理]